2. 耳川の民話や言い伝え

2-1:おせり滝（西郷村・小原）

耳川中流のおせり滝には、神秘的な美しさや、まわりの自然の豊かさから、龍の神様が住んでいるとの言い伝えが残っています。

その1

「正月元旦に、おせりの龍神が馬に乗って小原の氏神[※1]にお参りに来た。姿は見えないが馬の足音と鈴の音が聞こえ、舟渡し場の観音滝に虹の橋がかかって村人を喜ばせた」

その2

「小原の人たちは龍神様に毎年お願いしてお膳[※2]とお椀を借りてお祭りをしていたが、ある年、お膳を誤って壊してしまったのを、黙ってそっと返して以来、いくらお願いしても貸してくださらない」

その3

「龍神様の住んでおられる滝つぼのそばを通ると美しい鼓の音が聞こえ、金らん[※3]の美しい着物がたくさんかけてあった。もっとも心の正しい人でないとこのような物は見えなかった」

おせり滝

その4

「おせり滝のそばに四角い穴があり、どんなに日照りが続いても、この穴の水が無くなることはない。日照りで田畑の水が涸れて困った時は、龍神様に雨乞い[※4]をすると雨が降った」

※1氏神：土地の守り神
※2お膳：食器や食べ物を載せる台
※3金らん：錦の布に金の糸で模様を織ったもの
※4雨乞い：神や仏に雨がふるよう祈ること

◆耳川流域に伝わる民話マップ◆

2-2:観音滝（西郷村・上野原）

観音滝には、たくさんの石の観音様が谷一面にまつられているので、その名前がついています。

【2-2】:観音滝は、尖山と日陰山との間にあります。この滝にはたくさんの石の観音像が谷一面にまつられています。「昔、足の悪い石苗というお坊さんが『足が立つようにして下さい』と願いながら一生懸命観音像を刻んだところ、足が立つようになった。」という言い伝えがあり、現在残っている石像はその時のものだといわれています。

青頸観音
（村指定有形文化財三十三観音の一つ）

2-3:鳥の巣トドロ（諸塚村・鳥の巣）

山須原ダム下流には「鳥の巣トドロ」という名前の場所があり、いくつもの昔話が残っています。

その1

「昔、大阪の町に欲の深い米屋の夫婦がいました。米屋夫婦には一人娘がおり、この娘は父母のいじわるなやり方を悩んでいました。ある晩、白髪の神さまが現れ、『両親の悪業※1のせいで、お前は蛇の呪いを受けて生まれた。日向の国美々津の川上、鳥の巣トドロに早々に帰れ。』と言いました。娘は鳥の巣トドロに身を投げて大蛇となり住みつくことになったそうだ。」

観音滝

その2

「川遊びが好きだった東光寺の住職が、大蛇から襲われた時（大蛇は住職の香※2の匂いを嫌ったのではないだろうかといわれています。）『東光寺の続く限り、この寺の住職はトドロの淵には来ない。』と願いをたて大蛇から逃れて以来、東光寺の住職はこのトドロには行かないことが代々守られている。」

※1悪業:むかしの悪いおこない
※2住職:お寺のお坊さん

鳥の巣トドロ

その3

「ダムができる昭和初期までは、高瀬舟という船によって、木炭やその他の産物を美々津港まで積み出していました。船人はこのトドロを通る時は必ず身を清め、酒を差し出してから手を合わせて難を逃れるようにお祈りをして通った。」

【2-3】:鳥の巣トドロとは、耳川の山須原ダム下流にある、両岸に岩山が押し迫り、長さ200mぐらいの青々として深さの知れない神秘的な大淵です。

2-4:お牧がトドロ（諸塚村・下長川）

真弓岳から流れる渓谷の中に「お牧がトドロ」という名前の場所があります。巨岩がそびえて滝をつくり、昼でも暗く恐ろしいところです。

下長川の家にお牧という娘がいました。この娘に美しい若者が毎晩通っていたそうです。娘は若者と夫婦となる約束をしましたが、若者は名前も住んでいる所も教えてくれません。そこで娘は若者に知られないように、着物の裾に麻糸を縫い込んでおいて、翌朝その糸をたどって行くと、大きなトドロに出ました。そこでお牧は声をはり上げて、「姿を見せてくれ」と叫ぶと、世にも恐ろしい大蛇が現れました。お牧は大蛇と夫婦となる約束をしたことを悲しみ、滝つぼに身を投じて死んでしまいました。それからここを「お牧がトドロ」と言うようになりました。

「お牧がトドロ」は、昔から材木を流して通る時に恐れられている難所です。

お牧がトドロ

2-5：古原トドロ（諸塚村・古原）

耳川の支流、諸塚から北へ分かれる柳原川の中流に「古原トドロ」というところがあります。昔は大蛇が住むと伝えられ、両岸に絶壁が迫り古木におおわれて昼尚暗く、材木流しの一番の難所といわれて必ずお神酒を上げて通っていました。

ある日古原の人がここの上の方の道を通る時、古木が横たわっていて邪魔になるので、腰の刀を抜いてそれを切り払ったところ、大きな音を立ててはるか下のトドロ渕に落ちていきました。しかし、それからその家に不幸が続き、物知りに考えてもらったら、その古木の姿をしていたのはトドロの主の大蛇であったといわれ、それから宮や鳥居を建て村が十五夜の日、龍神さんとして祭りました。

今は宮も鳥居も朽ちていますが、大きな供養塔と観音像は今でも子孫の尾形家が祭っています。

古原トドロ

2-6：市山大明神（諸塚村）

市山の「まき」の木は、市山大明神のご神木として、大切にされています。

【2-6】：市山にたくさん生えている何千年も経た槇の老木を、広瀬市兵衛という人が伐ろうとしましたが、その木は市山大明神のご神木※であったためなかなか倒れず、京都の滝口大明神の印入り斧でようやく伐り倒し耳川に流されました。この槇の木を伐っている間中、毎日その付近に夫婦づれの白猿が来て、悲しげな表情で老木の倒れるのを見守っていました。そして木を流し始めると耳川に沿って、ついに美々津の浜までついて来ました。全部の流木を浜に引き上げ終わって、山師や番頭が美々津で酒盛りをしていると、その夜に浜で火災があり、なぜか途中で流した南天の木だけは、焼け残りましたが槇の木は全部焼けてしまいました。この白猿は市山大明神の使いであったそうです。それから以後、市山の槇の木は、ご神木であるとして誰も切らなくなりました。

この伝説は、当時の木材が、耳川を利用した川流しによって美々津に運ばれたこと伝えるものです。

市山神社（神社の所在地は椎葉村です。）

※神木：神社の境内に生えていたり、神霊が宿ると考えられている木。

2-7：桂正八幡（諸塚村・立岩、桂）

桂正八幡の神さまは京都からきたと言われ、ここにはそのとき神さまをお迎えに行った人たちのお墓が残っているそうです。

【2-7】：桂正八幡の神様は京都の葛城神社から来られたと伝えられています。その時に、この神をお迎えに行った人のお墓が残っているといわれています。

また、大友宗麟が島津氏と耳川で戦ったとき、水攻めに会い水に流される時、桂神から助けられたので刀を奉納したとも伝えられています。さらに、この戦に参加して桂で死んだという北里伯耆守のお墓もあります。

桂正八幡

【北里伯耆守戦死の跡】

熊本県の阿蘇家では昔、大宮司の職をめぐって兄弟で争いが起こり、遂に戦争にまでなりました。兄の惟長は鹿児島の島津軍の応援を頼み、弟の惟豊を攻めました。その為、惟豊は破れ、家臣の北里伯耆守為義（小国城主）と共に、日向の高千穂に逃れたましたが、なおも島津軍が追いかけるので、諸塚の七ツ山から立岩桂までたどりつき、そこで為義主従二十八人は全員非業の死を遂げました。

その後、小国の子孫にあたるという人が何人も墓参りに訪ねてきたといわれています。

北里伯耆守のお墓

2-8立岩大明神（日向市・美々津）

大むかし、栂の節の舟にのって耳川を下ってきた大明神様を、美々津の人がむかえてお奉りしたのが、美々津の立岩神社といわれています。

【2-8】：一説には、立岩大明神こそ神武天皇で、栂の節の舟に乗って耳川を下ったと言われており、それから立岩では栂の節はたいまつに焚かないと言う風習が残されています。

神武天皇が腰掛けたといわれる岩

立岩神社

2-9七ッ山太郎（諸塚村・七ツ山）

四ツ山太郎という山の精が魚売りの手助けで三ッ山太郎に勝ち、七ツ山の精になったお話があります。

「ある日、魚商人は行商※で日が暮れたため、農家の爺さんに泊めてもらうことにしました。爺さんは、山の精で四ツ山太郎といい、三ツ山太郎が攻めてくるので商人に手助けを頼みました。商人の手助けにより三ツ山太郎を倒し、爺さんは四ツ山と三ツ山を合わせて七ツ山の精になることができました。お礼に商人に七ツ山の木を全部あげると言いました。

間もなく商人の手で諸塚山を中心とした山々の木がきり倒されると、不思議なことに、材木はひとりでに川にすべり込んでいきました。耳川には毎日毎日、たくさんの材木が流れました。言うまでもなく商人は大金持ちになったということです。」

諸塚山の冬景色

現在の七ツ山地区

※行商：店を持たず、商品を持って売り歩くこと

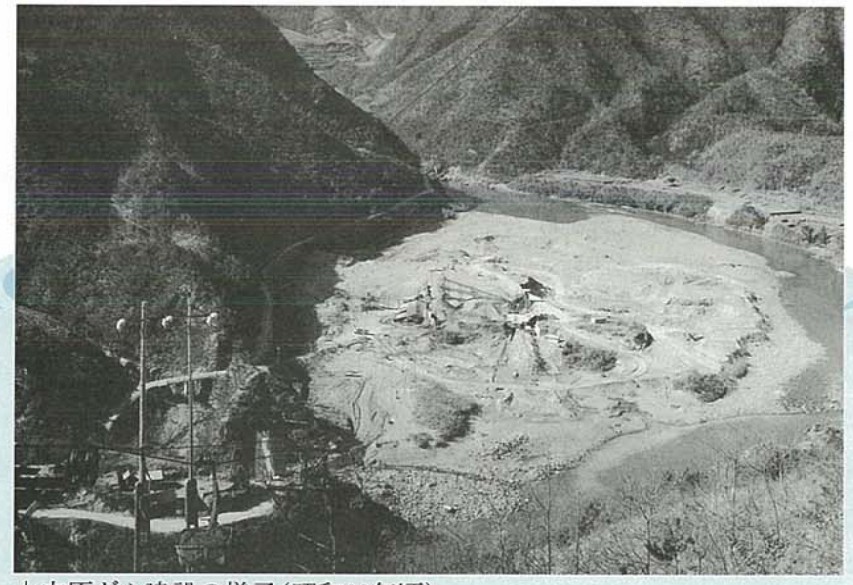
2-10:おそきさん祭り（中州のお宮）（西郷村・田代）

「おそきさんの祭り」はおそき太郎という池の水神のお祭りです。川の水によって生活をしていた人々の、水への尊敬と感謝を表した言い伝えも残っています。

「この水神さんには多くの願立てごとがあって信仰が深く、老人達がおとごえ峠を越える際、霧が深くて道に迷った時など、おそき水神に願立てして祈ると、不思議に霧がすうっと消え無事に峠を越えることができた。」

【2-10】：西郷村大字田代おそきに、おそき太郎をまつる祠がありますが、旧暦11月6日に「おそきさんの祭り」が行われています。以前は川の中州にお宮があり、大きい石がまつってありました。そのそばに池があったところから、おそき太郎を池の水神とも称したとされています。この祭日には必ず村の若者が盛んに相撲をとっていました。

中州のお宮があった場所
※現在、中州のお宮があった場所は、大内原ダムの建設によって湖底に沈んでしまいました。



大内原ダム建設の様子（昭和30年頃）